NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

余話　花束

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15667396

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, アバン, アバフロ, 子ヒュン, フローラ(ダイの大冒険)

ホルキア大陸旅の途中。本編から外れたこぼれ話。
新アニメ「闇の師弟対決」「最強の剣」放送記念。

テーマは「プロポーズ」なのですが、このテーマを引き受けてくれたのが、うちではこの８歳ヒュンケルだけでした・・・（長兄どうしたああ！）。本編「７」novel/15406332を前提としています。

余話　花束

　ホルキア大陸の遺跡の街を出て、アバンたちは、地底魔城を目指していた。
　その途中、遺跡の街から２日進んだところで、アバンたちは、街道の街に立ち寄った。
　その街は、これまでの街とは異なり、規模の割には人出が多く、広場には大勢の住民たちでにぎわっていた。
　街の広場には、いくつもの露店が出ており、また、路上にテーブルも設置されていた。繰り出してきた人々は、仲間と肩を並べ、昼間からグラスを酌み交わし乾杯をしていた。
　以前から人混みが苦手なヒュンケルは、街の熱気に圧倒された。彼は、傍らのアバンを見上げて助けを求めた。
「先生・・・これ、どうしたんですか？」
　すると、アバンは、こともなげに言った。
「収穫祭ですよ。」
「収穫祭？」
　ヒュンケルが聞き返すと、アバンはうなずいた。
「ホルキア大陸はね、葡萄の栽培が盛んなんですよ。ほら、この前立ち寄った遺跡の街にも葡萄畑があったでしょう？」
　ヒュンケルはうなずいた。
「あそこの葡萄は、晩生（おくて）でしたから、まだ実ってましたけど、普通はもっと早く収穫します。その葡萄を収穫して、ワインを仕込むと、この時期にその年の若いワインができます。ヌーヴォーっていうんですよ。そのワインができる時期には、こうしてお祭りをするんですね。」
「へえ・・・。」
「オマツリ—！」
　ヒュンケルが感心したように声を上げたのと対照的に、オレンジ色のアンデッドモンスターは、手をたたいてはしゃいだ。
「ホルキア大陸では、ワインは、若い人も飲みますが・・・さすがにあなたにはまだ早いですね。葡萄ジュースでも貰ってきましょう

かね。」
　アバンは苦笑した。
　子ども扱いされたヒュンケルは、なんとなく面白くなかった。まだ８歳の彼は、正真正銘、少年なのだが、そもそも、子どもは子ども扱いを嫌うものだ。
「いろいろとお店も出ているみたいですから、見てみましょうか。」
　そう言って、アバンは、ヒュンケルを連れ、露店を覗き始めた。バケルは、いつものように、彼らの頭の上をふわふわと飛んでいた。その様は、ちょうど、小さな気球のようであった。
　ふと、アバンは、１軒の露店の前で足を止めた。
　そこの店には、敷物の上に、小さな紙箱がいくつも並べられていた。
　紙箱のふたはどれもあけられており、中には、小さな石が１つずつ、収められていた。
　アバンは、興奮して、店主に話しかけた。
「あれ、珍しいですね。ロードクロサイトじゃないですか。この辺じゃ採れないでしょう？」
　アバンは、店頭の薔薇色の石を見てつぶやいた。すると、店番をしていた若い男は、嬉し気にアバンに話しかけた。
「お、お兄さん、詳しいね。」
「あなたが採集したのですか？」
「取引で手に入れたものも多いけど、自分で採掘したものもあるよ。このロードクロサイトは鮮やかだろう？なかなかここまでの色はないよ。」
「そうですねえ。」
　アバンが相槌を打つと、店主は自慢げに笑みを浮かべた。
　ヒュンケルは、その薔薇色の石を見て、ふた月前に別れてきた少女を思い出した。少女の髪の色は、この鮮やかな輝石と同じ薔薇色をしていた。
「この蛍石はきれいな紫色ですね。ヒュンケル、あなたに似合いそうですね。」
「・・・いや、俺はいいですよ。男なんで。」

ヒュンケルは、げんなりとしてアバンに返した。ヒュンケルには着飾るような嗜好はない。
「いえ、こういう石は、ただ飾りだけじゃなくてですね、いろいろな力を秘めていると考えられているんですよ。
例えば、この蛍石は、集中力を高める、こちらの水晶は浄化とかね。
もちろん、言い伝えというものも多いですし、効果がはっきりしないものもありますが、そう言われて持つと、なんとなくその気になる、ということもあるでしょう？だから身の回りの品につけたり、武器や祭具につけたりして効果を高めることを期待するんですよ。」
「いやいや、お兄さん、うちのは効果ばっちりだよ。」
「それはいいですねえ。」
アバンは、店主の意向を無視しない範囲で返事をした。
「それにしても、これだけ種類があると楽しいですねえ。
これは針水晶ですね。・・・あれ、こちらは・・・アンバーですか？こんな色のアンバーがあるんですか？」
「珍しいだろう。ブルーアンバーさ。お兄さん、よくわかったね。」
アバンの関心は、純粋に学術的なことであるのだろう。珍しい鉱石を見つけると、ヒュンケルとバケルにかまうことなく、興奮気味に、店主に話しかけた。
「ブルーアンバー・・・青琥珀ですね。実物は初めて見ました。本では見たことがあったのですが。」
「そうさ。琥珀は普通、褐色だが、ごく稀にこういう青い色のものが見つかる。別名『人魚の涙』っていうやつさ。」
「ロマンチックな別名ですね。」
アバンは、嬉しそうに感想を返した。
「こっちは蒼玉ですか。」
「ただの蒼玉じゃないよ。ほら、見てごらん。」
「すごい！星が浮き出るんですね。」
「どうだ、珍しいだろう。」
「ええ！」

食い気味にアバンが店主に話しかけていたが、ヒュンケルはそろそろ飽きてきていた。
　アバンを置いて立ち去ろうかとヒュンケルが考えていたとき、アバンは、最初に目を止めたロードクロサイトにもう一度目をやった。そして、彼は、穏やかに微笑み、つぶやいた。
「これはあの子に似合いそうですね・・・愛の石、ですか。」
　ヒュンケルは、ロードクロサイトの柔らかな薔薇色に呼び起された記憶の中の少女の名を口にした。
「マァムにはまだ早いでしょう。」
「ヒュンケル、私は誰とは言っていませんよ。」
　アバンが、意地の悪い笑みを浮かべて言った。
　ヒュンケルは、さっと顔を赤らめた。自分の心の中にあの少女があることを明らかにされ、恥ずかしさと、やり場のない苛立ちを感じた。
「・・・他の店、見てきます！」
　ヒュンケルは、バケルの腕をつかみ、アバンに背を向けると、その場を後にした。

　ヒュンケルは、バケルを連れて、露店の前を手持ち無沙汰に歩いていた。祭りのためか、飲食店が多く、ワインを売っている店や、チーズやハム、パンの店、果物を売っている店などが並んでおり、それらを喫食するためなのだろう、あちこちに、テーブルや椅子も置かれていた。
　その中で、ふと、ヒュンケルは、１軒の露店の前で数人の若い男性が集まっているのに目を止めた。
　若い男性の一人が、小さな花束を手に、照れた顔で談笑している。
　その男性を中心に、仲間と思しき、２～３人の若い男性たちが歓談していた。彼らの会話が漏れ聞こえ、ヒュンケルの耳にも届いた。
「今日の祭りで言うんだろう？」
「さすがに照れるよなあ・・・。」
「断られたりしてな。」

「そのときは、一緒に飲んでやるよ。」
　彼らが立っている前にある店には、地面にブリキのバケツが数個、置かれており、そこに、いくつもの小さな花束が生けられている。その奥には、若い女性が座っていた。彼女が店主なのだろう。ホルキア大陸ではあまり見ない、栗色の髪とはしばみ色の瞳をしていた。
　店主の女性は、ヒュンケルに目を止めると、にっこりと微笑んだ。
「どうぞ、かわいいお客さん。見て行ってくださいな。」
　ヒュンケルは、声をかけられて戸惑い、言葉を返せないまま、彼女と、売り物らしい花束の間を、何度も視線を往復させていた。よく見ると、若い男性の手に持っている花束と同じだ。この店で買い求めたものなのだろう。
　ヒュンケルが、この露店の前にたたずんでいると、若い男性たちの一人が、彼に声をかけた。
「おいおい、さすがに坊主には早すぎるだろ。」
　理由はよく分からなかったが、子ども扱いされていることだけはわかり、ヒュンケルはむっとした。今日は何故だかそんなことが続く日だ。
　ヒュンケルが不快な表情を浮かべたのが分かり、店主の若い女性は苦笑した。彼女は、ヒュンケルに呼びかけた。
「お客さん、旅の人？」
　大人のお客に対するのと同じような言葉に、ヒュンケルは表情をやわらげた。彼も丁寧に対応した。
「はい。今日着いたばかりです。収穫祭のことも、さっき聞きました。」
「じゃあ知らないんだね。今日の夜ね、ちょっとした催しがあるんだよ。」
「催し？」
　店主の若い女性は、柔らかく微笑み、うなずいた。
「そう。男女が互いに愛を打ち明けあうの。この花束は、そのためのものだよ。」
　そう言って、彼女は、バケツに生けられている花束たちを指さし

た。
　晩秋のこの時期、野を彩る色彩は限られる。しかし、ここに置かれた花束たちは、白や紫、ピンク、黄色など、その趣は素朴ではあるものの、柔らかな色を投げかけていた。
　アメジストセージの紫。
　サルビアの赤。
　オキザリスの白。
　クレマチスのピンク。
　野の花たちが優しくそよぎ、見つめているだけで穏やかな気分になれる。
「みんなの見ている前に出て、花束を相手に贈り、相手に想いを伝える。それを受けるときには、その証として、その花束から１本抜いて、相手に返すのよ。
　こんな風にね。」
　そう言って、彼女は、花束を一つ手に取ると、そこから一本抜いて、ヒュンケルに示した。それは、薄桃色の丸い球のような花で、その色が、やはり彼の中にある大切な少女の姿を思い起こさせた。
「恋人同士や夫婦が、お互いに日ごろの感謝や愛情を伝えることもあれば、好きな相手に好意を打ち明けたり、恋人に結婚の意思を伝えたり、いろいろあるね。」
　そう言って、店主は、先ほど花束から抜いた花を持った手をヒュンケルの前に出し、彼にその花を差し出した。ヒュンケルはどうしていいかわからず、戸惑っていると、横からそれを見ていたバケルがその花を手に取った。
　店主の女性は、少し驚いた顔をしたが、すぐに笑みを浮かべるとバケルに丁寧に礼を言った。
「ありがとう、小さなお客さん。受け取ってくれるのね。」
　すると、バケルは、照れたように頭をかき、花を手に持ったまま、くるりと宙返りをした。
「その花は、千日紅。」
「センニチコウ？」
「そう。『色あせぬ愛』という意味を持つ花だよ。」
「色あせぬ愛・・・。」

ヒュンケルは、じっと、バケルの手にした花を見つめた。
　店主の女性は、先ほど花を買ったらしい若い男性に声をかけた。その男性の手にした花束にも、同じ花があった。
「そっちのお兄さん、恋人に結婚を申し込むんだよね？」
「お、おう・・・。」
「うまくいくように祈ってるよ！」
「ありがとう。」
　若い男性は、頬を赤らめて、照れながらも店主に礼を言った。それを見ていた、周りの数人の若い男性も、彼の背をたたいて励ましていた。
　やがて、その一団が去ると、店頭にいるのは、ヒュンケルとバケルだけになった。ヒュンケルは、じっと、店主の前に置かれた花束たちを見つめていた。
　この街の収穫祭の中で行われているという愛の告白。
もし、自分がここの住人だったら。もし、あの子がこの街にいたとしたら。自分はどうしていたのだろうか。
　『色あせぬ愛』の意味を持つという、薄桃色の花。
　あの子の髪と同じ色をした、球のような花が揺れ、彼の中に、その花が現すように、色あせない想い出と笑顔がよみがえった。
　店主の女性は、真剣な眼差しを花束に向けているヒュンケルを黙って見つめていたが、やがて、つぶやくように彼に声をかけた。
「お客さんには、大切に思っている子がいるんだね。」
　ヒュンケルは驚いて顔を上げた。店主は、穏やかな笑みを浮かべてヒュンケルを見つめていた。
「年齢は関係ないよ。子どものときに運命の相手に出会ってしまう人もいる。お客さんの想う人がどんな子かはわからないけど、でも、この花束を見たときに、心に浮かぶ人がいるんだね。」
　ヒュンケルは、黙ったまま、うなずいた。
「その自分の気持ち、大切にしてあげてね。
　・・・よし、お客さんに、花束、一つあげるよ。」
　だが、店主の好意に、ヒュンケルはかぶりを振った。
「ありがとうございます。
　でもいいんです。

あの子は今遠いところにいます。次にいつ会えるのかもわかりません。」
　その言葉は、隠しきれない寂しさを帯びていた。会いたいと願う思いがにじんでいた。
　幼い少年から切ない心の声を聴き、店主の女性も痛ましげに瞳を揺らした。
　ヒュンケルは、いったん言葉を区切った。しかし、まっすぐに店主の女性を見上げ、その先の言葉をつづけた。
「でも、俺は、あの子と約束したんです。
　大切な、約束です。
　俺が、もっと大きくなったら・・・あの子を迎えに行けるくらいになったら・・・ちゃんと自分で言います。
　そのときに、花束を買いに来ますよ。」
　すると、店主は、少し驚いた顔をしたが、すぐに笑みを浮かべた。
「いいね。
　じゃあ、そのときまで、私はお客さんを待っているよ。
　またおいで。」
　その言葉に、ヒュンケルは、店主に頭を下げて礼を述べた。

　ヒュンケルは花束の店の前を辞した。
　人ごみにもまれながら、彼は、バケルを連れてそぞろに広場を歩いていた。すると、雑踏でも目立つ銀の髪を見出し、アバンが駆け寄ってきた。
「ヒュンケル！バケル！」
　アバンは、申し訳なさそうな顔を二人に向けた。
「よかった。はぐれたかと思いました。
　すみません、珍しい鉱物がたくさんあったんで、つい。」
「いえ・・・。」
　アバンの詫びに、ヒュンケルはそっけなく答えた。嫌味や無視ではなく、本当に気にしていないかの様子であった。
　アバンは、ヒュンケルを見返した。なんとなく、普段よりも雰囲気が柔らかい気がする。

アバンは、穏やかに微笑みながらヒュンケルに問いかけた。
「ヒュンケル、何かいいことがありましたか？」
「・・・いいえ、別に・・・。」
　すると、バケルが、アバンに１本の花を突き出すように見せた。先ほどの店でもらった千日紅の花だ。
「コレ、コレ！」
　アバンは、それを見ると、納得したようにうなずいた。
「ああ、千日紅ですね。」
「先生、知ってるんですか？」
「名前くらいは。
　独身者のボタン、という別名があるそうで、この花を胸に恋人に会いに行ったときに、花が枯れなければ恋が実るという伝説があるそうですよ。」
「へえ・・・。」
　ヒュンケルは、素直に感心した。何故かアバンは雑学に異様に詳しい。
　アバンは、嬉々とした様子でヒュンケルに報告してきた。
「さっきの店で私も聞いたのですが、今晩、恋人や夫婦で愛を告げるという催しがあるそうですね。見てみましょうか？」
「・・・いえ、いいです。」
　ヒュンケルは、ややげんなりした様子で答えた。その催しに、というよりも、そんな催しを聞いてヒュンケルが苦手な顔をするであろうことがわかっていながらあえて話を振ってきたアバンに、ヒュンケルは疲労を感じた。
　アバンは、バケルの持つ花に視線を移し、話題を変えた。
「千日紅は、不滅、不朽という意味もあるそうです。変わらないもの、変わらない愛を意味する花なんですね・・・。」
　ヒュンケルは、アバンの言葉を聞き、彼らの目指すこの先の城を思い起こした。
　変わらないはずだった毎日。
　不滅であったはずの地底魔城。
　だが、変わらないものなど何もないことを、ヒュンケルは知っている。

「変わらないものなんてありませんよ。」
　ぽつりとつぶやいたヒュンケルの言葉に、アバンは優しく答えた。
「そうですね。何もかもが少しずつ、変わっていく。季節も、自然も、気持ちもね。」
　気持ちという言葉に、ヒュンケルはどきりとした。自分の中に芽生えたこの想いも、時とともに薄れ、消えていくのだろうか。
　アバンは、穏やかな声で続けた。
「でも、変わり続けるのであれば、それもまたよし、ですよ。
　自分の思いも変わっていくとしても、消えていくとは限りません。より、強くなっていくことだってありますよね。」
　アバンは、少し目線を上げながら言葉を紡いだ。
　アバンは何のことを話しているのだろうか。
　ふと、ヒュンケルは、いつもよりもアバンを遠くに感じた。
「先生・・・？」
　ヒュンケルはアバンに呼びかけたが、アバンはいつものように、にっこりとヒュンケルに微笑みかけただけだった。

　フローラは、カール王宮の居室で目を覚ますと、朝日を浴びにバルコニーに出ようと思った。
　既に秋も深まり、朝晩は、かなり肌寒い。
　夜着の上にローブを纏い、フローラはバルコニーへと続く、大きな窓を開けた。さっと、晩秋の冷たい風が流れ込んできて、フローラは身を震わせた。
　ふと、フローラは、バルコニーに、普段はないものの影を見た。
　バルコニーの隅に、何かが置かれている。
　不思議に思い、フローラは、その影に近づいた。
「・・・まあ・・・。」
　フローラは、感嘆の声を上げた。
　それは、小さな花束だった。
　素朴な野の花で作られた、市井の人たちが手にするであろう秋の花の花束だった。
　フローラのような王族から見れば粗末とも受け取られるようなも

のであったが、フローラはそこに温かみを感じ、穏やかな気持ちになった。
　その花束の中に、小さなカードが添えられていることに、フローラは気づいた。
　そのカードは、花束の中でひときわ目立つ薄紅色の球のような花の陰にさしてあった。
　フローラは、カードを手に取った。
　そこには、見覚えのある筆跡で、二つの言葉だけが書かれていた。
　フローラは、その言葉を何度も読み直した。そして、その意味を確かめるように、小さく声に出して読み上げた。
「Your Majesty・・・unfading love．」
　カールの言葉で、「色あせぬ愛」と書かれていた